

# 古くからの実践行、忍辱波羅蜜の現代的解釈

金剛大学校 仏教文化研究所 HK 教授  
チエ ウン ヨン  
 崔 恩 英

## 1. はじめに

かなり前にダライ・ラマはインタビューでチベットを中国領に変え、チベット人を難民にした毛沢東を許しはするが忘れることはできないということを言ったことがあった。毛沢東がチベットを完全に占領する前に、ポタラ宮に幽閉させられた事を回顧しながら、自らの人生において忍辱波羅蜜を実践した時間だったという点についてはありがたいと思う、ということまで話したとのことだ。この文を読んだ後、筆者は忍辱波羅蜜が何であるかについて、また、それを実践するというこの意味を究理してみたいという考えを長年持っていた。本稿では経典で説明している忍辱波羅蜜の意味を見つつ、現代的な状況においてこれをどう実践するのかを明らかにしてみたい。

## 2. 経典に見られる忍辱と他の徳目との関係

### 2-1. 持戒と忍辱、忍辱と慈悲

梵語で kṣānti は忍や忍位が可能な漢語訳であるが、能忍、忍耐、忍辱、堪忍、忍受、安忍など、様々に漢訳された。『説文解字』によると、忍は能と同じ意味であり、以後、(堪) 耐の意味にも理解された。このため、能忍とは忍を重複して使用したのと同じことである。辞書の意味で忍辱は心を楽にし、外部からの体と心に対する侮辱と迫害に耐え、恨みを抱かず、堪当し、耐えることである。忍辱は、肉体的に難しいことと精神的に耐え難いことに堪えることだと一般的に知られている。言い替えれば、忍辱はよく堪えることだという理解が蔓延している。

『毘婆尸仏経』では持戒をするにあたって、忍辱が最もすぐれた徳目であり、能忍で涅槃を得るという内容がある。

ブッタがおっしゃった。「あなたたち、よく聞きなさい。私は今、波羅提木叉を演説しよう。忍辱は最高だから、能忍で涅槃を得る。過去にブッタが説いたが、出家して沙門になり、殺害など、体と口の七種の咎を遠く避け、このような戒を守ることを具足するなら、大きい知恵を興すことができる」<sup>1)</sup>。

この偈頌は持戒—忍辱—知恵が連関していることを見せてくれている。殺害・邪淫・盗みを代表とする、誤った体の行為、悪口・離間すること・嘘・無駄な言葉を代表とする、誤った言語行為を制御するのが持戒である。この七種あるいは意業を含む十種の不善な行為は一旦犯すとだんだんと実行する方へ啓発され、しない方へ向うためには努力が必要となる。その努力が忍辱である。それによって涅槃に至ることができるので持戒を具足すれば知恵を得るに至る。これは過去のブッタたちもそのように述べたし、現在のブッタもそのように説いているため、持戒で忍辱を強調していることが分かる。

一方、忍辱は布施、慈悲と共に善根を生み、功德を積む多くの修行徳目の中で重要だという文章が頻りに散見される。

大善見王が静室で心の中で考えた。「私は過去の世で、どんな行為をして、どんな善根を磨いたから、今の世で尊く生まれ、大威徳、すぐれた姿、壮健な寿命があって、比べる者がいないのか。確かに過去の世に広く布施、

忍辱、慈悲を磨いたから、今、このような果報を得ただけなので、私は今、さらに精進しなくてはいけない<sup>2)</sup>。善根と功德の基盤だった忍辱と慈悲は、『法華経』に至って經典を説くために持つべき基本的な修行の条件だという重要な文章に発展する。

是の善男子・善女人は、如来の室に入り、如来の衣を着て、如来の座に座してこそ、四衆のためにこの經典を広く説くことができる。如来の室とは一切衆生に対する大慈悲心のことである。如来の衣とは柔和忍辱の心のことである。如来の座とは一切法空のことである<sup>3)</sup>。

特に、慈悲を室に、また、忍辱を体にまとう衣に比喻<sup>4)</sup>する法華経のこの句は、『正法華経』には見られず、『妙法蓮華経』でのみ見られる。これは法華経を大衆に説くことの難しさをよく現わして見せてくれている句である。法華経を説法するために慈悲と忍辱を持って、はっきりと一切法空を体得した状態でのみ、經典を説くことができるというものである。

## 2-2. 大地の受容性に比喻される忍辱

それでは、忍辱の意味は何であろうか。よく堪えるという忍辱はそのような状況で心を興さないことと、それを受け入れることだという実例が『増一阿含経』で見られる。

- 1) 常に忍辱を行い、対象に及んでも、(心を) 興さない、満願盛明比丘はこのような人である<sup>5)</sup>。
- 2) 私の声聞(弟子)の中で、まるで大地が受け入れるように、心に忍辱を抱くことが一番すばらしい比丘尼がいるが、曇摩提比丘尼がその人である<sup>6)</sup>。

一般的にある対象が自分に精神的・肉体的 不善を行う時、それに対して怒りで対応しないことを「耐える」・「堪える」と言う。初期の中国仏教では多くの阿含経を総括的に編集しながら、徳・悪・依という主題に分類して整理し、『三法度論』を編集した。ここで、忍辱はつらいことだが、高貴な力、浅はかな力をつくして自制して、怒らず、対象に報復しないことが[堪耐]という意味だと整理している<sup>7)</sup>。代表的に怒らないことは忍辱の力を増長させる<sup>8)</sup>。堪えたり、我慢することは対象に対して否定的感情の状態を表出しないものである。そういう状態を簡略に説明したものを例文1が示している。この時、私たちの堪えることとは、ひもじさ・寒さ・苦しさ・雨風・各種害虫・悪口の言葉・叱る言葉・体の痛みや苦しみなどで、これに耐えることができ、再び生じないようにすることができたら辛さと苦しみから脱する<sup>9)</sup>。このような忍辱修行を実践できる人が最も尊い人である<sup>10)</sup>。

このような忍辱は否定的な対象・状態だけのみならず、肯定的な対象・状態においても実践されなければならない。それで、このような人は苦しみに出会っても心配せず、さらには楽しみに出会っても嬉しくない<sup>11)</sup>。忍辱の状態は例文2のように、主に大地に比喻される。大地が対象の美醜、是非、浄不浄を分けず、万物を載せているのと同じ姿が忍辱の状態である。つまり、初期經典で忍辱は、様々な辛さや楽しみの状態でも心が動かないこと、そして対象を抱いて受け入れることができる状態として描写された。

## 3. 忍辱と忍辱波羅蜜は違いがあるのかどうか

### 3-1. 大乘經典に登場し始める忍辱波羅蜜

#### 1) 本生譚の忍辱仙人の説話のモチーフを通じた忍辱の繰り返しの増長

忍辱行の実践が具体的に台頭したのは、仏典文学の一ジャンルである本生譚、すなわち釈迦牟尼の過去の人生の多くの菩薩行の話の中に、忍辱仙人が登場し、反復的位相が増長されたと考える。ある王が森に鹿狩りに出かけ、

忍辱仙人に会った。王は忍辱仙人がどのくらい忍辱することができるのかを試すため、手足を切って生命を危険にさらすが、彼は恨まない。他の天神が来て、王とその国の人を害しようとする忍辱仙人の承諾を望んだが、彼は承諾しない。それとともに忍辱の徳を称嘆する<sup>12)</sup>。『賢愚経』で、迦梨王はまだ四無色定、四無量心、四禪を得ていないと答える提波梨仙人が忍辱を修行するという話に怒って、彼の両手、両足、耳と鼻を順に切り、忍辱できるかどうかを問う。仙人は顔色も変えず忍辱する心を忘れていないという証拠として、自分が本当に忍辱したら手や足などが元の通りに回復し流した血が牛乳になると話した。彼の言葉通り、形象が復歸し血が牛乳になると、王は懺悔して仙人を供養する。その姿を見て、仙人に嫉妬した多くの婆羅門が、仙人がいた所を見えないように糞を塗って汚すのだが、仙人は相変らずそれを忍耐し、自分が成仏した後、先に彼らが清浄するように祈る<sup>13)</sup>。この時の忍辱仙人がまさに釈迦牟尼仏の前世であったと言うのが最も広く知られた忍辱仙人の説話である。この内容は『雜宝蔵経』において、忍辱仙人を模範として忍辱を修行しようとした娑羅那比丘が悪生王に殴られ手足を切られた後復讐する気持ちを固めるが、迦旃延が夢の中に現れ、王への復讐よりも自分の敵（煩惱）を先にとり除きなさいという説法によって悟りを得る、という内容に脚色される<sup>14)</sup>。迦利王と忍辱仙人の話は『金剛経』『大方等大集経』などにも記述され、伝承された。

忍辱仙人の説話は、だんだんと身体的傷害を増加し、加害者を責める周辺の状況を許容せず、恨まない程度を向上させる方へ展開していく。さらには加害者には怒りで復讐するより、自分の内面にある煩惱の敵を先にとり除かなければならないという内容までを含んだ。忍辱は過去のすべてのブッタと釈迦牟尼仏が過去に磨いた修行のように、ブッタになるのを願いながら磨く、修行の一つとなるのだ。このような展開の様相は忍辱が単発性ではなく、多く繰り返されなければならないという印象を与えている。

## 2) 揺るがない（不動心）忍辱波羅蜜でブッタになる

一方、大乘仏典で継承されている忍辱波羅蜜は、菩薩こそが波羅蜜（pāramitā）ができるという形態で展開される。本生譚の菩薩行が果てしない実践行につながり、無限に常浄される忍辱波羅蜜が設定される一方、他の大乘仏典では怒らない心そのものをブッタの最高の徳目とした仏陀が登場する。それが阿閼仏である。『阿閼仏国経』に登場する阿閼菩薩（不動菩薩）とは、いかなる対象に対しても怒る心を興さないという願を立て、長い年月、それを実践した比丘が得たブッタの名号である<sup>15)</sup>。この時、阿閼（不動）は何が動かないのか。どんな対象に対しても怒らないことに願を立てたので、これは怒りで心が動かないという意味であろう。阿閼仏は怒りによって揺れない心で、修行の最高の階位である仏の位に到達した。忍辱波羅蜜行を最もよく代弁している。

### 3-2. 文献的典拠に見る忍辱と忍辱波羅蜜の区分

#### 1) 忍辱と忍辱波羅蜜

忍辱と忍辱波羅蜜は文献的典拠で見ると、違いがあるのか。『大乘理趣六波羅蜜多経』の「安忍波羅蜜多品」において、忍辱と忍辱波羅蜜がどう区別されているのか説明してみたい。ある部分では安忍と安忍波羅蜜多を混用しているように見えるが、後には明らかに安忍と安忍波羅蜜を正確に区別しながら説明している。

- このような因縁で私の悪口を言う人に対して慈悲と憐愍を起し、これを安忍するなら、たとえ、このようにうまくいっても、安忍と呼ぶ。もし、分別を離れたら、波羅蜜多と呼ぶ<sup>16)</sup>。
- 菩薩がこの時、自分の咎を見て、（自分を傷つけた）人に対して悪心を出さず、善の知識という考えで、深く尊重する心を出す。（これは）ただ、安忍であって、波羅蜜ではない。なぜならば、自他に対する分別があるためである<sup>17)</sup>。
- また、菩薩が、瞋恚が多くの苦しみの原因であることを知り、安忍が蛮行の根本を行うことを知る。この因縁で安忍を行えば、ただ、安忍と言い、波羅蜜多とは言わない。なぜならば、善悪に対して分別を起したからである<sup>18)</sup>。

私と他人、善と悪などの分別から離れて無分別の立場で安忍するのが波羅蜜多で、ただ、それを安忍するだけでは安忍波羅蜜ではない。敷衍して言えば、ただ、堪えてばかりいるのではなく、それに対する二分法的な分別の観念を離れた状態で堪えてこそ波羅蜜多と言えるというのである。これは大乘菩薩の六波羅蜜の修行体系が中道の悟りが土台にある状態で実践されなければならないということを教えてくれている。そして、最終的に次のように整理する。

このように真実の究竟の安忍は一切法において、非自非他、非有非無、非生非不生、非滅非不滅だが、このような（安）忍を獲得したら、真の究竟の無生法忍と言う。これを安忍波羅蜜多と呼ぶ<sup>19)</sup>。

究竟の無生法忍が安忍波羅蜜多である。これは確実に、初期の經典や本生談では表現されていない忍辱の説明方式である。忍辱が単純に我慢して耐えることではなく、中道的立場を確実に知った状態で行う忍辱こそ、忍辱波羅蜜になると区分している。

## 2) 忍辱波羅蜜と無生法忍

安忍波羅蜜と無生法忍の関連性を説明している内容は『大般若経』に書かれている。下の引用文は長い文章だが、無分別に土台を置く安忍波羅蜜が、無生法忍に帰結されることにおいて、その方法まで説明していて、最も具体的な内容を記しているため、全文を載せる。

先賢よ！ 菩薩摩訶薩が深い般若波羅蜜多を行う時、相を離れた煩悩のない心で、安忍を磨くことができる。この菩薩摩訶薩は初めの発心の時から妙なる菩提座に楽に座る時まで、途中で、あらゆる有情が様々な瓦や石、刀、棒を持って来て傷害を加えても、この菩薩摩訶薩は一瞬でも怒って恨む気持ちを興さない。この時、菩薩は二つの（安）忍を磨かなければならない。二つとは何であろうか。一つ目はすべての有情が悪口を言って傷害を加えることを受け入れながらも、怒ったり恨んだりせず、怒りを抑える安忍（伏嗔患忍）である。二つ目は無生法忍をさすが、この菩薩摩訶薩がいろいろな侮辱や責める言葉を聞いたり、刀や棒で危害を受ける時、このように思惟して観察しなければならない。「侮辱するのは誰（＝何）か。傷害を加えるのは誰か。侮辱を受けるのは誰か。傷害を受けるのは誰か。誰が怒り恨むのか。誰が堪えるのか」、また「一切法性がすべて畢竟空であり、法がいつも不可得なのに、まして法性があるのか、いまだ法性がないのに、いわんや有情があるのか」と観察しなければならない。このように見る時、侮辱する主体や侮辱を受ける対象、傷害を与える主体や、傷害を受ける対象のすべてが存在せず、体がばらばらに分かれても、その心は安忍し、全く異なる考えはない。すべての法性について如実に観察すれば、また、無生法忍を証得することができる。何を無生法忍と言うのか。煩惱は終わって（畢竟）生じず、また、諸法は遂に興きないから、微妙な知恵はいつも断ち切ることがない、ということを使う。このため、無生法忍と呼ぶのである<sup>20)</sup>。

上の引用文は忍辱を二つに区分する段階で、二つ目の無生法忍が能所の無分別と諸法不生、不起の状態を観察して体得した忍辱であることを説明している。このように『大般若経』では忍辱波羅蜜を忍辱と区別しつつ、無生法忍の地位を確固にさせていると考える。そして、これは生忍、法忍という二つの用語で整理されることもある<sup>21)</sup>。

## 四 3-3. 二種類から三種類に展開される忍辱波羅蜜の解釈

ところで、『解深密経』（T16, p.705c17-18）では忍（辱）に三種類あると説明している。

一つ目は（内外）の恩讐の迫害に忍耐すること、二つ目はすべての苦しみを楽に受け入れること、三つ目は諸法の空性を如実に観察し、知った後の忍辱である<sup>22)</sup>。

三つ目の忍辱波羅蜜は諸法の功成を確実に体得した状態で実践されることにより、前の無生法忍と脈絡的に連結される忍辱である。大乘仏教の忍辱波羅蜜の立場に立って、二種類の忍辱で十分だと思うこともできるが、なぜ、

三種類の区別を再び提示したのか。三種類の安忍波羅蜜で新しく記述された説明は「すべての苦しみに対して楽に受け入れること（安受苦忍）」である。

三忍が登場する早い時期の大乗經典は『阿弥陀經』である。『阿弥陀經』には西方の極楽世界の無量寿仏の道場の木を見た天・人たちは無量寿仏の威神力によって音響忍・柔順忍・無生法忍を得ると言っている<sup>23)</sup>。これは第一忍、第二忍、第三忍の形態で、多くの経で説かれている<sup>24)</sup>。また、法蔵菩薩の48番目の願として、他方世界のすべての菩薩が自分の名号を聞いて帰依して精進すれば、かならず第一忍、第二忍、第三法忍を得て、すべての仏法から永遠に退転しない願を立てた<sup>25)</sup>。この三忍それぞれの内容は他の經典で菩薩が得た十法忍の中で見られる。無生法忍の解釈を除く他の二つの忍の説明は次の通りである。

そのような音響忍とは何か。すべての聞こえる音に対して驚かず、怖がらず、あせらない。（これを）楽しく思っ  
て従いながら、行動するにおいて、背いたり、間違ふことがない。これが音響忍である。何を柔順法忍と言うのか。  
菩薩が応じて進まなければならない法に随順し、生じ、法が起きて、行われることなどを観察しながら、引  
繰り返ったり、散乱したりしない。たとえば、諸法に柔らかく従えば、適切に尺度に合わせて済度する。志性  
が清浄して、平等を守って磨いて、誠実に精進し、随順して入って成就する。これが柔順法忍である<sup>26)</sup>。

柔順法忍に対する内容は、菩薩は法に従って生じて法に従って行われることを見ながらも心が揺れないというものである。これは「すべての苦しみを楽しんで受け入れる忍辱」という説明に符合する面があると考えられる。

一方、『坐禅三昧経』では新しい用語を使う三忍と共に、有部修行体系である四善根との結合を試みて次のように三忍を説明している<sup>27)</sup>。菩薩が数息観をする過程で磨く三忍は生忍、柔順法忍、無生法忍と言う。生忍は他の衆生が悪口を言ったり、鞭打ったり、殺害したりするなど、様々な悪い事をして、怒ったり、心が動かず、慈悲でこのような衆生が良くなるよう願う心を捨てない。さらには、自ら悟って、必ずこのような衆生を済度すると考え、怖がったり難しがらないのである。外で多くの攀縁を考えたら、これを包摂して帰って来させるのが生忍である。柔順法忍は菩薩がすでに生忍として限りなく功德を得たが、この功德の果報がはかないことを知って、自らの福を求めることの儻さを知り、衆生のために常住法を求める。この常住法は因縁によって生ずる不生不滅、不生不滅、非有非無、不受不著し、言説がすべて切れて、心の道も切れた涅槃性のようなものだということが分かる。これが法の実相であり、この法の中で信じる心が清浄し、滞りなく、障害もない。柔らかく知って、柔らかく信じて、柔軟に精進する。これを柔順法忍と言う。無生法忍はこのような実相法の中で知恵と信頼と精進が増進し、諸根がさらに鋭くなる。それとともに「たとえば、声聞法の中で煖法、頂法の知恵と信頼、精進が増長すれば、忍法を得たのと同じだ<sup>28)</sup>」と述べた。これは、声聞の凡夫が見道を得る以前の段階で使った修行法の用語を活用しながら、菩薩が見道をするためには必ず三忍を修行しなければならないと（菩薩見道応行三種忍）説明していた。『坐禅三昧経』の解説の特徴は加害者である対象を済度しようとする心に転換された大乗菩薩の説明を提示している点である。

同じ内容を竺法護が漢訳した『修行道地経』では、温暖法、頂法を説明した後に成就する法忍の内容を下と中の柔順忍法で説明している。それとともに五根を磨くが、まだ完全に成就できていない状態で上の世俗尊法に到達すると言っている。これは四善根の忍法の内容と柔順忍を同格化し、世第一法は柔順忍を証得し、最後に到達する最も尊い段階の忍法として説明している<sup>29)</sup>。

注意すべき点は『坐禅三昧経』『修行道地経』では柔順忍の内容と四善根の忍法が関連しているが、阿毘達磨で説明されている忍法の内容は、忍辱と直接的に関連させて説明するものではないということである。すなわち『阿毘達磨俱舍論』などでは四念住以後に順決択分である四善根について説明していて、

この頂善根の下中上の品が徐々に増長し、円満になった時に生ずる善根を忍法と呼ぶ。四諦の理に対して忍可することの中で、最もすぐれているからである。また、この座では忍が退いたり、落ちたりすることがないため、忍法という。この忍善根が安足し、増進されれば皆、法念住である<sup>30)</sup>。

有部では四諦十六行相を観察することに関して、煖・頂・忍法を説明しながら、四諦の理について最もすぐれて、忍可するから忍法だと説明している。この時の忍可は「許可する」「決択する」という忍の意味を採用したもので

あり、忍辱の意味で忍を説明しているとは考えにくい<sup>31)</sup>。四善根の忍法を、大乘仏教の三忍のひとつである柔順(法)忍と連関させる解釈は、有部の修行体系では見られなかったと考えられる。したがって、竺法護や鳩摩羅毘が漢訳した経典が修行体系の解釈に影響を与えた可能性があるかと推定することができる。

『般若経』では生忍と法忍の二忍に区分したが、法忍を柔順法忍と無生法忍に分けた形態の説明を『坐禅三昧経』で叙述している。無生法忍が「柔順忍から知恵、信頼、精進が増長して完成される」と説明することは、一方では二忍だけでも十分に忍辱を説明することができたことを代弁しているとも言える。『座禅三昧経』の柔順法忍の説明は『般若経』が無分別に基盤して忍辱波羅蜜を説明するのとあまり異なることがない説明方法だからである。柔順(法)忍という用語は三忍で構成される以前、多くの大乘経典で菩薩が持つべき重要な徳目の一つとして説明されていたのである。柔順忍、柔和、柔軟等々と描写される表現がそれである。六波羅蜜を順に磨きながら、柔順忍を得て、柔順忍を得たら、すぐに六波羅蜜が完全にできると考えられたこともあった<sup>32)</sup>。また先に、柔順忍にとどまって無生無滅など、すべての戲論を無くせば、無生忍を得ると言っていて、無生忍の前に柔順忍を説明したりもした<sup>33)</sup>。

しかし、『解深密経』では忍辱波羅蜜を三つに区別し、柔順忍という用語の代りに「すべての苦しみを忍辱すること」とのみある。『仏説法集経』でも同様の形態の三つの忍辱があり、このような忍辱を行わなければならない、これが可能な原因を提示している。

菩薩摩訶薩には三種類の忍辱がある。すべての苦しみに忍辱すること、他人が悪を行っても報復せず、忍辱すること、諸法無生を知って忍辱すること。善なる男子よ、すべての苦しみに忍辱することは自らが築いた業であるを知っているからである。悪行に報復せず、忍辱することは一切衆生に対して子という心を持つからである。諸法(無生を知って)忍辱することは、一切法において無生の智を得るからである。これを菩薩の三つの忍辱と言う<sup>34)</sup>。

この説明ですべての苦しみを受け入れるということは、宿命論的な帰結が垣間見られるようである。仕方がないから、今は原因が分からないが、この状況は私が築いた行為の結果として受け入れなければならないと結論づける感じである。これら経典では柔順忍という用語を用いて三忍を説明していない。『般若経』の影響を受けたグループの中で有部の修行体系と関連させた修行経典を編集する過程において、柔順忍を入れた三忍の忍辱波羅蜜の修行体系が完成されたかと推定できる。『解深密経』と『法集経』では忍辱波羅蜜ではなく、ただ忍という用語を使っていることも、これらが忍辱波羅蜜と忍辱の区分にあまり敏感ではなかったが、実在的に「すべての苦しみを受け入れること」の必要性を認識したためだと考える。

#### 4. 忍辱の現代的意味と実践法：受容と認定

『般若経』で生忍と法忍が定立された以後に登場する三つ目の忍辱について筆者はこう推論した。刀、棒、石、侮辱やひどい言葉を使う外部の迫害に耐え、無分別と空観に立脚して無生法忍を体得したとしても生じる苦しみがあった。これはたぶん体と口で行われる外部からの悪行を克服し、諸法不生の理を確実に知った状態でも、依然、忍辱しなければならないことが発生した多くの修行者に必要な説明方法だったのではないだろうか。したがって、その時、その時のすべての苦しみに忍辱することは苦しみ自体を認めることであり、時にはこれを認可しながら、そのまま受け入れることでもある。

それはある場合には内部の煩惱であるかもしれないが、今まで直面することのなかった形態の外部的な苦しみかもしれない。また、外部の悪行に堪えることを忍辱だと言うこと、そして、無生法忍が多分に理性的な忍辱であるのに比べて感性的に受け入れなければならない対象がさらに多いため、直接的な現場で、その時の状況に応じて受け入れる忍辱についての説明が必要だったのだと考える。また、そして、それを通過する全体的な過程を説明する用語が必要であったのかもしれない。そのすべての苦しみに対して、まるで大地がすべてのものを受け入れるように、ありのままを受け入れることを言いたいがために、忍辱波羅蜜の過程としての柔順忍が説明されたのではない

のだろうかと考える。孔子が「不怨天不尤人」と言ったのも、これと類似している。

前文献で見てきたことを参考にすると、忍辱は忍耐よりは認定の意味がさらに大きい。つまり、忍辱は「受け入れること」[受容]である。『阿含経』で大地が（すべてのものを）受け入れることと同じだと言っているのが、このような表現なのである。『大般若経』では安忍がどこから出てくるのかを問う文殊菩薩の質問に対してブッタは「一切の有情を受け入れること」から出ると答えている<sup>35)</sup>。『般若経』では忍辱が私と他人をありのまま認める心の姿勢であるという典拠を明らかに提示している。

それならば、現実的な人生で私たちは何を、どう、受け入れなければならないのか。具体的に実践方法を考えてみたい。インターネットの普及により、これまでの百年間より、数百倍も速くて広い範囲の時・空間を現代人は知ることができるようになった。この中で過度な競争に苦しみ、徐々に他人と疎外されていく一日一日を生きていく現代人は、外部的に与えられる多くの物質的・精神的・環境的対象によって、心を動かされながら生きていく。しかし、先にこれを受け入れて、認める練習を実践することができたら、次の段階で、耐えるのが少しは易くなるであろう。忍辱は受け入れて認めることを前提にしているというのが筆者の基本的な考えである。

この時、対象を認めるのには限界があったりするが、対象を完全に理解するために、自分の状態を認めることも重要である。「汝自身を知れ」という神託と同様、自分自身を知ることが強調するブッタの教えに従えば、自分自身の状態を正確に理解して、ありのままに認める忍辱行が実践されなければならない。まさに自分自身を知る努力をする実践を続けるのが忍辱波羅蜜の実践の始まりなのである。現代社会で最も必要な忍辱行は各自、自分自身がどのような体と心の状態にあるのかを明らかに知って、それを受け入れ、その心が対象にまで拡がるように実践することである。

しかし、自分を知って認めることが自分の合理化にとどまっていたら、それは忍辱行としての実践ではない。また、無条件で対象に堪え、許す忍辱行には限界がある。したがって、今日の忍辱行は過去と同様に、自分に正直で誠実に守るべき徳目としてある。それゆえ初期の経典では戒律と関連して、最も最高とされる徳目として忍辱を賞賛したのである。またブッタの遺訓に怠けずにまじめに、四念処を修行するように言ったこととも関連がある。四念処は自分の体と心の状態を見つめ、さらにはそれを対象に拡大する。身、受、心、法の四念処の中で三念処が自分の体と心の状態を観察する内容というのは、自分の心身状態を正確に知ることが重要であることの証拠である。そのような忍辱行の実践は窮極的に本来、私に明るい知恵、あるいは仏性があることを信じて踏み出す初めの一步でもある。結局、個人の努力による実践行に戻ったが、自分を正直に認め、対象をありのまま受け入れるのが忍辱波羅蜜の始まりなのである。

## 参考文献

教養教材編纂委員会編、『仏教学概論』、東国大学出版部、1988

コ・イクジン、『仏教の体系的理解』、セト、1998

シム・ギョンホ訳、『説文解字の世界』、報告社、2008

チョ・ソンテク、『仏教と仏教学』、トルペゲ、2012

パク・テウオン、イ・ヨンゲン訳、『仏教の歴史と基本思想』、大円精舎、1989

加部富子、「忍辱と慈しみにする一考察」、『印仏研』56(1)、2007

真田康道、「無生法忍の成立について」、Journal of humanistic studies (20)、1986

趙性澤、The Psycho-semantic Structure of the Word kṣānti (Ch. Jen)、(Buddhism.org Buddhist eLibrary)

## 註

- 1) 『毘婆尸佛經』(T1, p.158a20-22) 佛言。諦聽、我今演說波羅提目叉曰。忍辱最為上、能忍得涅槃。過去佛所說、出家作沙門、遠離於殺害、身口七支過、持此戒具足、發生大智慧。
- 2) 『大般涅槃經』(T1, p.202a15-22) 大善見王於靜室中、心自念言、我過去世、有何行業、修何善根、生世尊貴、有大威德、色力壽命、人無等者。正當由於過去世中、廣修布施忍辱慈悲故、今獲得如此報耳。我今宜應更修進勝。
- 3) 『妙法蓮華經』(T9, p.31c23-27) 是善男子善女人、入如來室、著如來衣、坐如來座。爾乃應為四眾廣說斯經、**如來室者、一切眾生中大慈悲心是。如來衣者、柔和忍辱心是。**如來座者、一切法空是。
- 4) 『大乘本生心地觀經』(T3, p.306c5) にも「**忍辱為衣慈悲為室**」という形式の文章がある。
- 5) 『增一阿含經』(T2, p.558c10-11) 恒行忍辱、對至不起、所謂滿願盛明比丘是。
- 6) 『增一阿含經』(T2, p.729a26-29) 我聲聞中第一比丘尼、心懷忍辱、如地容受、所謂曇摩提比丘尼是。
- 7) 『三法度論』(T25, pp.16c24-17a1) 忍辱者苦。貴賤力自制不怒怨、忍辱為苦。貴力賤力隨其事自制不怒。怨為苦所逼自制、是堪耐義。為貴力所迫、怒而不能報。但弊惡人故起怨。若於大力所迫不起怨。是忍辱。為賤力所加怨賤力、怨家能報。若不報者是怨。如是眾生過及行過、堪耐此義。
- 8) 『三法度論』(T25, p.16c18) 無患於忍辱增。
- 9) 『增一阿含經』(T2, pp.740c26-741a1) 彼云何漏恭敬所斷。於是比丘、堪忍飢寒勤苦風雨蚊虻惡言罵辱、身生痛腦、極為煩疼、命垂欲斷、便能忍之。若不爾者、便起苦惱。設復能堪忍者、如是不生、是謂此漏恭敬所斷。
- 10) 『增一阿含經』(T2, p.729a26-29) 比丘、復有二人。云何為二。彼一人聞法能堪忍修行、分別護持正法。第二人不能堪忍修行其法。彼能修行法者、於此諸人最尊第一。
- 11) 『長阿含經』(T1, p.7a6-7) 逢苦不感、遇樂不欣、能忍如地、故號沙門。
- 12) 『僧伽羅刹所集經』(T4, pp.118c25-119b8)
- 13) 『賢愚經』(T4, pp.359c8-360b1)
- 14) 『雜寶藏經』(T4, p.459a21-23)
- 15) 『阿闍佛國經』(T11, p.752a29-b4) / 『大寶積經』「不動如來會」(T11, pp.101c28-104c13)
- 16) 『大乘理趣六波羅蜜多經』(T8, p.892c22-24) 由此因緣、於彼罵者生大悲愍而安忍之。**雖能如是但名安忍、若離分別是則名曰波羅蜜多。**
- 17) 『大乘理趣六派羅蜜多經』(T8, p.893a15-17) 如是思惟深生慚愧、菩薩是時見已過已、於割截者生媿惡心善知識想、深生尊重、**但名安忍、非波羅蜜多。**何以故、由於自他有分別故。
- 18) 同上(T8, p.893a18-21) 復次、菩薩了瞋恚法諸苦所因、知行安忍萬行根本。以是因緣而行安忍、**但名安忍、非波羅蜜多。**何以故、由於善惡生分別故。
- 19) 同上(T8, p.894b5-8) 佛告慈氏如是真實究竟安忍、於一切法非自非他、非有非無、非生非不生、非滅非不滅、獲此忍者名真實究竟無生法忍、是名安忍波羅蜜多。
- 20) 『大般若經』(T6, p.944c6-26)
- 21) 『摩訶般六波羅蜜經』(T8, p.390c13-14) 摩訶薩住二忍中、能具足羸提波羅蜜。何等二忍、生忍法忍。
- 22) 『解深密經』(T16, p.705c17-18) 忍三種者、一者耐怨害忍、二者安受苦忍、三者諦察法忍。
- 23) 『阿彌陀經』(T12, p.334a13-15)
- 24) 『月燈三昧經』(T15, p.556a2) 謂知彼第一忍第二忍第三忍 / 『悲華經』(T3, p.184b25) など。
- 25) 『阿彌陀經』(T12, p.330b2-5) 第四十八願、我作佛時、他方世界諸菩薩、聞我名號歸依精進、即得至第一忍第二忍第三法忍。於諸佛法永不退轉。不得是願終不作佛。
- 八 26) 『如來興顯經』(T10, p.614b21-27) 彼則何謂為音響忍。諸所聞音不懷恐怖不畏不懼、喜樂思順、諸所遵行無所違失、是音響忍。何謂柔順法忍。菩薩隨順應遊法生、而觀察法造立行等、不為逆亂。設使諸法應柔順者、當度之。志性清淨、遵修平等、勤加精進、順入成就、是柔順法忍。
- 27) 『坐禪三昧經』(T15, p.285a9-b16)
- 28) 『坐禪三昧經』(T15, p.285b15-16) 是名無生法忍、譬如聲聞法中煖法頂法智慧信精進增長得忍法。
- 29) 『修行道地經』(T15, pp.217b8-218a7)
- 30) 『阿毘達磨俱舍論』(T29, p.119b28-c3) 此頂善根下中上品、漸次增長至成滿時有善根生名為忍法。於四諦理

能忍可中此最勝故。又此位忍無退墮故名為忍法。此忍善根安足增進皆法念住。

- 31) 趙性澤、The Psycho-semantic Structure of the Word kṣānti (Ch. Jen)、(Buddhism.org Buddhist eLibrary) 参照。ハングル要約文で「相当初期から 'kṣānti' が '堪える' という意味の他に '好きだ'、'選択する'、'受け入れる' という意味で使われていて、Thera-gāthā などの初期経典でも阿毘達磨論書などで見られる '慧' の一作用として '認可'、'決択' などの意味で使われていることが見られる」としている。'kṣānti' がさまざまな意味を持つと言うこの内容を参考にする時、忍可の意味は認可、決択の意味と見ることができる。
- 32) 『大方等大集經』(T13、p.344c26-28) 如是凡夫以猶豫心於大乘中行六波羅蜜。次第修學得柔順忍。不久能滿六波羅蜜。
- 33) 『大智度論』(T25、p.662b26-29) 菩薩先住柔順忍中、學無生無滅、亦非無生非無滅、離有見無見、有無見非有非無見等、滅諸戲論、得無生忍。
- 34) 『佛說法集經』(T17、p.624c2-7) 菩薩摩訶薩有三種忍辱。所謂諸苦忍辱、他所加惡不報忍辱。知諸法無生忍辱。善男子、諸苦忍辱者、以知自作業故。不報惡忍辱者、以於一切眾生得一子心故。諸法忍辱者、以於一切法得無生智故。是名菩薩三種忍辱。
- 35) 『大般若經』(T7、p.954a29) 佛言安忍流出容受一切有情。